# キリストを信じなくても救われるなら

２０２４年　8月
佐々木　正明

ここしばらく、私は体調を崩して、文章を書くことはほとんど不可能でした。海外における宣教師活動を終えて、帰国後、考察を重ねてきた問題についても、中断したままになっていました。しかし、何とか気力を振り絞って、もう少し進めてみたいと思います。論じていることは日本に於ける宣教です。そして、この問題を考察し続けるときの大前提は、徹頭徹尾、聖書の記述と教えに立脚することです。それはとりもなおさず、西欧のキリスト教という宗教の教えを離れることでもあり、私の文章を読む羽目になった、クリスチャンたちの多くには、不快な思いをさせることになると、少なからず心を痛めているものです。

西欧のキリスト教は、聖書至上主義を掲げる保守的プロテスタントも含めて、みな、聖書の教えとはかけ離れたもので、自分たちの伝統や習慣を、聖書を用いて正当化し、自分たちの文化や環境に都合の良い、信仰形態を積み上げてきたものです。どう見ても、とても聖書の教えに従っているとは、思えないものが多いと言わざるを得ません。西欧の宣教師たちは、その西欧の社会に都合良く構築された、キリスト教と呼ばれる信仰の在り方を、普遍的に正しい宗教だと信じて、文化や習慣や社会形態が全く異なった日本に持ち込んだのです。彼らは日本の宗教、文化、生活習慣が、自分たちのものとはずいぶん異なっているのを見て、これらを一方的に見下し、「罪」呼ばりし、非難し続けて来たのです。これでは、普通の日本人にとっては、たまったものではありません。キリスト教の宣教が日本では困難を極めている一つの理由が、その辺りにもあると考えます。そこで、この西欧キリスト教を通して、神の存在の確証を得、聖書の教えにも触れることが出来た私ではありますが、あらためて西欧のキリスト教を離れ、聖書の教えだけに立って、日本の宣教について、考えようと決意するにいたったのです。

これまでの論を通して、私はすでに、人が救われるためには、救い主であるキリストを信じる必要がないことを、聖書の記述と教えを論拠にして、強調してきました。私たちが救われるために必要なのは、私たちがキリストの贖いの働きを、知っているかどうかによらず、また贖いの御業と言う奇想天外の神様の御業を、私たちがどこまで理解しているかに関わらず、私たちが信頼する神様が、キリストの贖いの働きをご存知である、という事実に関わるのです。そのような論を進めてきた私の聖書的な根拠は、アブラハムは神を信

じて義とされたという、ロマ書に記された、パウロの「普遍的福音の論証に関わる記述です。アブラハムは、キリスト誕生の二千年ほども前に、生きていた人物です」。キリストのことなど知る由もありませんでしたし、私たちがこの上なく大切にする、罪の許しも、十字架も、悔い改めも、彼の脳裏には映っていなかったはずです。

しかし彼は、間違いなく救われたのです。彼だけではありません。彼と同時代の多くの人々、彼よりも前に生きていた多くの人々、ノアも、エノクも、アダムとエバでさえも、キリストの贖いの功績によって救われたと、私は信じています。しかし、彼らの誰一人として、キリストを信じてはいませんでした。唯一人例外的なのは、ヨブです。ヨブは筆舌に尽くしがたい苦しみの中で、神と彼の間に立ってくださる、仲保者、あるいは贖い主の必要性を感じ、そのお方が必ず、後の世にこの地に立ってくださると、預言したのです。ヨブはアブラハムと同じころ、あるいはそれより少し前に、生きていたと考えられます。彼は当然、イスラエル人ではありませんでした。アブラハムもイスラエルの先祖ではありましたが、イスラエル人ではありませんでした。彼が什一の贈り物を捧げた、メルキセデクもまた、イスラエル人ではありませんでした。しかし彼らは救いを受けたに違いありません。つまり、イスラエル人ではなかった人々が、イエス・キリストを知らず、信じることもないままに、イエス・キリストによる救いを受けているのです。

彼らはキリストを信じたのではなく、天地創造の神様を信じたのです。そしてその神様は、時間を超越したお方であり、キリストとその十字架の贖いのみ業を、良くご存知だったのです。アブラハムもほかの人々も、彼らの知識や理解によらず、彼らが信頼した神様の知識、神様のご理解の故に救われたのです。本当の所、旧約時代に生きていた神の人たち、モーセも、ヨシュアも、サムエルも、ダビデも、イザヤもエレミヤもヨナもエステルも、みな彼らがキリストを信じたからではなく、神様を信じたから救われているのです。その神様が、キリストをご存知だったから、救われたのです。そしてキリストもまた、アブラハムの時代より前からこの世におられ、アブラハムをご存知だったのです。というより、キリストと神様は本質的に一つであり、キリストはキリストであると同時に、天地創造の神様であり、エローヒムであり、エルであり、ヤーウエであり、アドナイであり、主（キュリオス）であられたのです。人が救われるためには、このお方を信じればよいことであって、ことさらリストを信じる必要はないのです。

キリストを信じなければならないという言い方は、旧約聖書の流れの中からの発想であり、旧約聖書の教えに捕えられていた人たちの論なのです。すなわち、ユダヤ人クリスチャンたちの理解であり、初代のクリスチャンたちの考え方でした。それは旧約聖書の学びからの当然の結論であり、間違ってはいません。でもあくまでも、選民であるユダヤ人の信仰形態だったのです。使徒パウロは聖霊の啓示を受け、救いはユダヤ人の枠に留められ

るべきではなく、全異邦人に及ぶ普遍的なものであると論じました。異邦人の使徒と言われる所以です。しかしその彼の論調は、あくまでもユダヤ人的であり、パリサイ派の神学に則った議論でした。つまり、ユダヤ人の内側からの議論であり、救いはユダヤ人の枠を打ち破るのであるという叫びでした。このパウロの感覚は、しっかりと初代の教会の中で育てられ、普遍的救いの神学が打ち立てられました。ただパウロも時の人、時代と環境の子にすぎませんでした。

私たちが今必要としているのは、ユダヤ人の信仰形態の中から発展させせられた、普遍的救いの神学ではなく、初めから、ユダヤ人の枠の外に立った俯瞰的な神学なのです。なぜなら私たち日本人には、ユダヤ人の枠に閉じ込められた救いの概念から、論を進めるのではなく、初めから全人類の祝福、全人類の救いを論じる、普遍的救いの神学が必要だからです。全人類的感覚、俯瞰的見方に立つと、ユダや人は全人類の救いと言う一大事業のために、駆り出された一民族に過ぎず、救いの大河の本流ではないのです。いかに優秀な民族であり、ノーベル賞を受けた者を、最も多く輩出している民族であろうとも、非常に金持ちが多く、今でもその少ない数に似合わない絶大の富と、力を持っているとしても、それらは、神の救いの大事業完遂のために選ばれた、一民族に付随する祝福の一つだと考えられたとしても、彼らはあくまでも、目的遂行のために選ばれた一民族であり、救い対象そのものではありません。救いの対象は全人類なのです。

キリストは、ユダヤ人の救いのために死なれたのではありません。新約聖書を軽く読み進めると、救いはユダヤ人に与えられたのにもかかわらず、ユダヤ人の不信仰と不従順のために、ユダヤ人から半ば取りあげられ、改めて、全人類の救いとして啓示され、異邦人にも与えられるようになったと理解しがちです。しかしよくよく聖書全体を読むと、福音ははじめから、異邦人もユダヤ人も含めた、全人類を対象に計画されたものであることが明らかです。キリストの死は選民であるユダヤ人のためではなく、すべての民族の為だったのです。それなのにユダヤ人たちは、救いを自分たちだけに与えられる祝福として理解し、異邦人が救いを享受するには、ユダヤ人にならなければいけないと考えました。救い主キリストは全人類の救い主ではなく、ユダヤ民族の救い主と変えられてしまったのです。

普遍的福音の神学を打ち立てた使徒パウロも、そのような環境の中で、新進気鋭のパリサイ派学徒として育ち、救いを独占するユダヤ人の、優先性を信じて疑いませんでした。救われるためには、すべての異邦人は正式にユダヤ人にならなければならないと、固く信じていたのです。ですから、パウロが福音の普遍性と言う、歴史的大転換の啓示を直接神様から受けたとき、彼の理解は、ユダヤ人の枠を超えた救い、ユダヤ人、ユダや国家の壁を打ち破って、全異邦人に及ぶ福音が提示されたと理解したのです。パウロにとっての福音は、ユダヤ人に捕らわれない、ユダヤ人と異邦人の間の隔てを、破壊するものだったの

です。

ところが、神様の立場からご覧になると、普遍的福音の啓示は、福音についての新しい啓示でも、福音の性質の修正でもなく、誤解されていた福音理解の矯正、誤りを正す啓示だったのです。神様の福音の対象は、初めから全人類でした。それをユダヤ人の枠に閉じ込めたのは、ユダヤ人たちの手前味噌の理解にすぎませんでした。その理解があまりにもかたくなで、福音の真の在り方を妨げる形になってきたのです。それで神様は、軌道修正を強制されたのです。ただ、パウロも人の子、時代の子、環境の子でした。彼はあくまでも選民意識の中から、その選民意識をぶち壊す福音理解をしたのです。

ただし私たち日本人は選民ではありません。まったくの異邦人です。福音の普遍性を、異邦人の立場で理解しなければならないのです。つまり、キリストを信じる信仰への「養育係」を、与えられなかった民族として、養育係の不在の信仰、養育係の助けを得ることが出来ないまま、信仰による救いを得なければならないのです。パウロの言う、養育係の助けを得てのキリスト信仰では、完全な異邦人である日本人には、不充分なのです。

パウロの信仰形態を観察すると、「養育係」のいないキリスト信仰には、殆ど関心を持っていなかったようです。福音が異邦人に及び、異邦人のクリスチャンが多くなってきても、彼は養育係に固執していました。そして、ユダヤ人の信仰と同じような信仰を異邦人にも求めています。とは言え、さすがにパウロは鋭い感覚を持ち、物事をしっかり観察できる人でした。パウロはユダヤ人の信仰形態、養育係と全く関りを持っていなかった人々に対しては、かなり異なった取り扱いをしていました。ルステラにおける出来事も、アテネにおける偶像礼拝者に対するアプローチにも、パウロの宣教者としての適応性、異邦人の立場を理解して歩み寄る、柔軟な姿勢が感じられます。

でも、パウロが宣教したのは、パウロと同じ時代の同じ文化、かなり共通の言葉も話せた、グレコローマンの文明に生きる人たちでした。ユダヤ人にも、異邦人にも、多くの共通要素がありました。ところがマルタ島のような辺鄙なところに押し込められた時、パウロはかなり異なった人々、養育係とは全く関りの無かった人たちを相手に、福音を語ることになったようです。彼はそこに一冬、おおよそ三カ月滞在し、奇跡も行い、多くの島民に受け入れられ、尊敬もされていたのが明らかです。パウロのことですから、三か月間福音を語らずにいたなどと、信じることはできません。毎日福音を語り続けたはずです。ところがどうやら、一人の回心者も現れなかったようなのです。

パウロが地中海沿岸の片隅で伝道をしていた時、そこから一万キロメートル程も東に行った絶海の列島、日本にも、たくさんの人たちが住んでいました。パウロの同民族の先祖

たちが、アッシリアに滅ぼされてから東に旅を続け、この列島に辿り着いたということも、あながち空想だけの話ではないとしても、日本人は何からなに迄異なった異邦人だったのです。でもそこに住んでいた日本人の先祖たちも、神様のみ姿に似せて造られたものとして、気高い天の存在を感じる人間としての、本能をもって生きていました。パウロが信じていたアブラハム、イサク、ヤコブの神様、イスラエルの神様、モーセの神様が、その日本列島にもおられたのです。そしてメルキセデクに語りかけ、ヨブに語りかけられたように、日本人にも語りかけ、ご自分の永遠の性質を啓示しておられたのです。そして日本人も、その神の啓示をある程度理解できたのです。日本人も、神様の姿に似せて造られた人間としての根源的な性質を、ことごとく失ってはいなかったからです。だからこそ神様は語りかけることが出来たのです。日本人は、多くの自然に囲まれ、その自然を通して神様の自己啓示を受けて、気高い永遠の栄光の存在者を理解しました。その結果、日本人は目に見えず、手で触れることもできず、口で説明することもできない、この栄光の天的な存在者を認め、崇め、祭り、感謝してきたのです。

ユダヤの宗教環境に育ち、グレコローマンの文化に生きていたパウロには、想像もつかない生き方をしている人々がいたのです。彼らの救い、彼らの信仰について語るとき、養育係は何の助けにもなりません。ユダヤ人の内側からの普遍的福音の理解ではなく、ユダヤ人の外側からの見方が必要だったのです。日本人は、律法に教え導かれた信仰理解では、掌握できない存在なのです。とはいえ聖書には、このようなユダヤ人の枠外の人々の、救いも示されています。すなわちアブラハムとその一族の救いであり、メルキセデクの一族の救いであり、ヨブの一族の救いなどです。私たちが日本人の救いを語るとき、これらユダヤ人ではなかった人々の救いに、例証を求めるべきです。アブラハムがどうして救われたか、ノアがどうして救われたかです。アブラハムとノアには、キリスト以外の救いの道があったのでしょうか？　そんなことはあろうはずがありません。キリストは唯一の救い主なのです。では、キリストを信じることなどありえなかった彼らは、どのようにして救われたのでしょうか。ユダヤ人ではなく、異邦人である日本人の救いは、本来、イスラエル民族出現以前の、異邦人と同じ立場の人々の救いを、参考にすべきなのです。神様がそれらの人々に、どのようにお近づきになり、導きをお与えになったか、もっとまじめに考えるべきなのです。

そこで大切だったのは、いわゆる聖書啓示のような啓示ではなく、むしろ自然啓示と言う、キリスト教社会では軽視されて来たものです。ロマ書の一章十八節以降で語られているように、神は自然を通してご自分を啓示なさったのです。おわかりのようにその啓示は、人間に理解されるということを前提とした啓示です。なぜ人間に理解されるべき啓示だったのか。それは人間が神様に似せて造られ、たとえ罪を犯して神様に追放されてしまった後でも、創造の時に神様に与えられた能力を、維持していたからです。天地創造の神様は、

罪を犯して追放された人々をも、そのままお見捨てになることはせず、追いかけ追い求め近づいて語りかけ、啓示をお与えになったのです。アブラハムやメルキセデク、あるいはヨブやノア達に啓示をお与えになったように、イスラエルから１万キロメートルほどほども離れたところに住む、日本人にも、啓示をお与えになり、日本人が正しい神認識をもって神様を感知し、礼拝するようにお導きになったのです。ロマ書一章十八節以降の記述は、そのように解釈されます。

もちろん、罪を犯して神から遠ざかり、この世の君の支配の中で生きていた日本人の、神認識の力は相当落ちていたことでしょう。旧約聖書を通してイスラエル民族に与えられた、強い導き、指導、教育とは雲泥の差がありました。しかしそれでも日本人は、その与えられた神に似た姿の能力、本源的資質、すなわち本能によって、神様の教えと導きを理解し、それを自分たちの言葉で表現し、自分たちが良しとする方法で従ったのです。ヘブル語も、ギリシヤ語も用いず、当時の日本語、当時の彼らの言葉で行ったのです。当然、神様の名はエローヒムでも、ヤーウエでもありませんでした。しかし気高い天的な存在者として理解し、共通の名前も決まらないままに、祀り、祝い、崇め、礼拝し、祭りを行ってきたのです。つまり、日本人も、天地創造の神様を、日本人なりに理解し、礼拝してきたのです。それなのに、なぜ、欧米のキリスト教は日本人が感じ、礼拝して来た天的な存在者を認めず、西欧キリスト教の神を、無理矢理に持ち込もうとするのでしょうか。「日本人が昔から崇めてきたお方が、天地の創造者なのです」。それで、いいではないですか。

私たちは伝道の初っ端から、日本人に敵対感情を持たせる必要はないのです。私たちは同じ神様を信じているのです。ただ、私たちは互いに遠く隔たった土地、文化、原語の中で生まれ育ってきましたので、同じ神様についてでも、随分理解や取り扱いに差が出来ています。「互いに、理解の不足もあることでしょう。誤解もあることでしょう。でも互いに信頼して話し合えば、必ず共通点と合意点が見つかり、共に礼拝が出来るはずですよ」と、語ることが出来るはずです。私たち人間が、天地創造の素晴らしい神様に似せて造られていると言う一点で、私たちは、日本人の信仰と聖書の信仰の共通点を見出すことが出来、日本人の信仰の素晴らしさに気付くはずです。異邦人としての日本人が持っている、神様似せて造られた姿、すなわち心の律法も、イスラエル人に与えられた文字で書かれた律法も、同じ神様から与えられたものであり、心の律法が文字で書かれた律法に先行し、心の律法が文字で書かれた律法を判断するのです。ぜったいにその逆ではありません。

日本人の宗教的感覚は、聖書の記述するユダヤ人の宗教感覚に、よく似ています。先ずどちらも、いわゆる悪霊や汚れた霊、幽霊や天使、あるいは悪魔や神のような霊的存在を認める、多神論的感覚を持っています。またそのような霊的存在が、あらゆる自然物に宿る、あるいは乗り移る憑依の現象を認め、汎神論的傾向を強く秘めています。ところが、

日本の宗教感覚と聖書の宗教感覚とには、決定的違いもあります。日本の感覚あるいは意識では、すべての霊的存在が、一つの大きな霊的世界の中に入れられてしまう、傾向があるのです。それに対してユダヤ人の宗教意識では、天地の創造者である絶対の神、万物をお造りになった超越者である神と、他のあらゆる存在物との差、違い、明白な断絶、絶対の格差が明白なことです。ユダヤ人にとっての神は、創造者であり、他のすべての物、すべての神々も、被創造物に過ぎないのです。日本人の宗教感覚では、気高く尊い天的な存在者をかすかに意識していながら、その天的な存在者と魑魅魍魎の間には切れ目がなく、繋がったままなのです。それで、一方では天的な気高い存在者を意識していながら、他方では曖昧な多神教的神感覚のままに放置され、ともすれば、八百万の神々に対する信仰が、日本人の信仰形態であると、誤って語られてしまうほどなのです。

私たちは、日本人の神意識、神感覚の二重性というか、異なった感覚が一つに繋がってしまっていることに、気付かなければなりません。日本人の宗教性、宗教意識の最も気高いところは、日本人の精神である神道の純粋な信仰です。切れ目のない神道の神々の繋がりの中で、最も気高い位置にある神様の概念です。先に、日本の神意識は八百万の神々であり、それらの神々が切れ目なく繋がっていると言いましたが、良く観察してみると、微妙に切れているところもあるのです。それは、神道の神々の中で最も高位の神様は、他の神々を超越していて、日本人の意識の中でも別格の存在であり、他の神々とは繋がっていない、神ではない神、天的な存在者なのです。

この日本人の神意識の中で、最も高い地位におられる方は、神道の中で、目で見ることも、手で触れることも、言葉で説明することもできないお方と、認識されています。ですから、本来の神道には、神様の御姿を示す偶像はありません。絵画もありません。ご神体などと言う言葉も存在しますが、そのご神体が存在するのは稀で、例外的です。本来、目で見ることも手で触れることもできない、存在であるはずだからです。有名なミケランジェロの、天地創造の絵を思い出して下さい。中年の荒々しいとさえ思える男性の姿をした神の指が、命を吹き込まれる前のアダムの垂れた指に、まさに触れんとしています。日本の神道的な意識では、天的存在である神様を、絵で表現することなど、まさに冒涜以外の何物でもないのです。キリスト教神学の神論を読むと、神はああだこうだと、まな板の上のコイのように切り刻み、事細かに、やれ本質は、属性はなどと論じています。知りたいことを知り、その知識を蓄えようとするギリシヤ的思考は理解できます。しかしそこに、絶対者、超絶者、無限の神様に対する畏れ、尊敬の念は感じられません。まさに不敬罪です。天的な神様を地に引き下ろす行為です。

それに対し、日本人の宗教意識の、気高い部分の現れである神道では、神学はありません。神様に対する説明も、学問も一切ありません。唯その天的な存在を感じ、畏れ、敬い、

感謝し、賛美し、祝い、祀るだけなのです。願い事を捧げることさえ、憚（はばか）られることが多いのです。日本人はその気高い天的なお方の存在を意識し、その方に生かされている、そのお方に守られている、そのお方に養われていると感じて、その気高さに恥じないような、生活をしようと心がけるのです。この日本人が感じている天的な存在者には、正確には、名前さえありません。昔、西行法師が伊勢神宮にお参りをした時、「何事のおわしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるる」と詠った通りです。伊勢神宮が天照大神を祀っていたことは西行も充分に知っていたはずです。しかし彼は「何事のおわしますかは知らねども」と言っているのです。あるいは、感覚としては「お天道様」と呼ぶ存在が、まさに朧気ではありますが、日本人が感じているこの天的な存在を呼ぶ名前に、一番近いかもしれません。天の道、天と言う気高い存在が示す人の道、生き方、イエス様が「私は道であり、真理であり、命である」とおっしゃった意味に、通じるところがあるように感じられます。非常に細い管ですが、共通の感覚が流れているようです。その感覚を利用して、天地の造り主の福音を語ることこそ、肝要だと思うのです。パウロがアテネの偶像礼拝者たちに向かって「皆さんは、とても信仰に熱心ですね」と、好意的に語りかけたよりは、よほど、好意的に語りかけることが出来ると思います。パウロは偶像礼拝者たちに、好意的に語りかけました。何かを礼拝しようという宗教心を持つのは、まさに人間であることの証拠であり、責められるべきではないのです。ただ彼らは偶像礼拝に陥っていました。しかし、私たちが語りかける日本の多くは、まだ、偶像礼拝にまでは落ち込んではいない、ぎりぎりの線で、踏みとどまっていると考えられるのです。

　日本人には日本人の律法があります、それは、日本人には律法と言うような、堅苦しい言葉では理解されていません。しかし、日本人的心情、日本人的感覚、日本人的宗教観、日本人的道徳観、日本人的倫理観、日本人的美的感覚などという言葉で、表現されているものです。この日本人的なものこそ、聖書が言う「心に記された律法」であり、「自分自身」と言う律法であり、神に似せて造られた本源的人間の姿なのです。この心の律法はすべての人間に与えられたものであり、日本人だけに与えられたのではありません。しかし日本人は、それを本来の姿に最も近い形で保持し、日常の生活の中で守り続けていると言えます。それは、日本人が偶像礼拝に溺れることなく、目に見えず、手で触れられることもない、気高い天的な存在をそのまま崇め、敬い、礼拝してきたためです。確かに日本人の多くは偶像礼拝の一歩手前まで行っています。でも、そこで踏み止まっているのです。ご来光を拝みに、富士山に登る人たちが後を絶ちません。彼らは昇り来る太陽に向かって手を合わせ、あたかも礼拝しているような姿を見せます。でも彼らのほとんどは、「自分は太陽など、拝んではいない」と言うことでしょう。

この場合、たとえ日本人が太陽に向かって柏手を打ち、礼拝しているように見えたとしても、彼らが礼拝しているのは目に見える太陽ではありません。あるいはそのようにしている人たちでさえも、うまく説明はできないかもしれませんが、太陽の熱さ、温かさ、莫大なエネルギー、育てる力、動かす力、万民に与える恵みなどを感じ、それらを目に見えない天的な存在の象徴として受け入れ、その太陽の背後におられて、太陽を通してご自分を現しておられる、天的なお方を礼拝しているのです。イスラエルの民は神様に反逆したために、毒蛇に噛まれて、死ぬ者が続出したことがありました。このとき神様は、モーセに命じて青銅の蛇を作らせ、それを竿の先に高く掲げさせ、この蛇を仰ぎ見るようにと仰せられました。そして、神様のお言葉に素直に従って、青銅の蛇を仰ぎ見た者は、たとえ毒蛇に噛まれていても、命を救われたのです。この青銅の蛇も、非常に偶像に近い存在でした。事実イスラエル人のある者たちは、後になってこれを偶像にしてしまいました。しかしそれを作らせたのは、他でもない神様ご自身です。筆者である私には、なぜ青銅の蛇でなければならなかったのか、よくわかりません。炎の蛇と表現された蛇が、神様の怒りの象徴だったのかもしれません。ただ見上げるという行為が大切だったのだろうかと、思い迷うだけです。でも、神様を見上げるという行為が、救いの基本なのです。イザヤ書には次のように記されています。「地の果てのすべての者よ。わたしを仰ぎ見て救われよ。わたしが神である。ほかにはいない。（イザヤ４５：２２）このようにおっしゃる神様が、実はヤーウエであり、エローヒムであり、エルであり、アドナイであり、主キリストなのです。

そしてまた、「わたしが神である。ほかにはいない」とおっしゃるお方が、太古の昔から日本にも住んでおられて、日本人を愛し、これを救おうと、ご自分を現して来られたのです。日本人は、神様の御姿に似せて造られた、人間の本源的な性質によって、本能的にこの天的なお方を感じ、非常に浅い理解にすぎませんでしたが、目に見えないお方、手で触れることも、言葉で説明することもできない至高のお方、天的な存在と認めて、崇め、敬い、畏れ、感謝し、祀り、祝ってきたのです。日本の神道の精神はここにあるのです。そしてさらに、異邦人の聴衆に向けて語った、パウロの言葉によると、だれでも熱心に探し求めさえすれば、この神を見出すことが出来るようにされているのです。ただ残念なことに、神道では、気高い天的なお方の存在を感じ、認め、敬い、礼拝はしていますが、このお方をあまりにも畏れ、このお方に関する考察は一切避けてしまったため、見出すに至っていないとも思われるのです。そこを見出せるようにお手伝いするのが、私たち聖書を知る日本人の役目だと思うのですが、いかがでしょう。

一方、最近、神道関係系の人たちが、神道の神々に対する礼拝の態度が、世界の平和をもたらすと叫んでいます。彼らに言わせると、神道の通俗的信仰の部分に認められる、八百万と言われる神々が、互いに平和裏に存在しているところから、自分とは異なった他者を理解し受け入れる精神を高め、世界平和に貢献するという理屈のようですが、まったく理にかなっていません。八百万の神々のような汎神論的信仰、あるいは多神論的信仰は、日本の宗教に独特なも

のではなく、むしろ世界中の多くの土着の宗教観に通じるものだからです。そしてそれらが世界の平和に貢献するとは、とても思えないのです。日本人の他人を思いやる精神を、そんなことに結び付けるのは、我田引水も甚だしいと感じます。

多くの一般的日本人、いわゆる大衆は、あまり学問を積んだ人たちではありません。少なくても、本人たちはそのように感じています。宗教についても、倫理についても、あまり学んだことはありません。でも、そういう普通の日本人の父親が、時には息子や娘に、何か一言残してやろうと思い立つこともあります。そのような時、彼らが言う言葉は大体決まっています。「お前はこれから生きて行くうえで、何をやってもいい。自由だ。しかし、他人に迷惑をかけることだけはするな」。何の学問もなく、高尚なことを言う力もないが、親としてひとこと言わせてほしい。お前は何をしようとお前の自由だ。それが人間だ、しかし、その自由をはき違えてはならない。責任を伴ってこその自由だ。その責任を伴った自由な行動を、目に見えない天的なお方がご覧になっていらっしゃるのだから、人間としての生き方は忘れるな。それは他人の迷惑にならないようにすることだ」と、まあ、こんな風に長いセリフを、短く言っているのでしょう。だいたい、そんな口幅ったいことを言う資格は俺にはないんだけど」と、言うところでしょうか。でも、これが日本人の平均的倫理観であり、そこに隠れている宗教観なのです。

私はフィリピン北部の山岳地に住む、イゴロットと言われる民族の間で宣教師活動をしてきました。彼らについて、こんな逸話を聴いたことがあります。

フィリピンがスペインの植民地から、突然、自分たちの意思に関係なく、アメリカの植民地にされて数年後、開拓精神に燃えるアメリカは、それまで放置されていた未開部族イゴロットが住む、北部山岳地の真ん中を南から北まで縦断する、道路建設に乗り出しました。アメリカ人技師たちは、本国から持ち込んだ高価な測量機器を、原住民であるイゴロットの男たちに運ばせて、まるで獣道のような、厳しく滑りやすい道を進んでいましたが、暑さの激しい午後、運んでいた測量機器を降ろさせ、休憩を与えることにしました。ところが荷を運んでいたイゴロットたちは、その場に座り込む代わりに、たちまち下方の奔流の方に滑り降りて行ってしまいました。しばらくして、のどを潤したイゴロットたちは、細い竹の節々に穴をあけた手製の水筒を、杖がわりにして駆け登って来たかと思うと、アメリカ人たちに差し出しました。その親切心にアメリカ人たちは思わず微笑んだのですが、隊長はあえて厳しい口調で言いました。「お前たちはどうして貴重な測量機器を、すべて置きっぱなしにして、水を飲みに行ってしまったのか。もしも盗まれたりしたら一大事だ。何カ月もかけて、またアメリカから取り寄せなければならない。

すると人夫頭のイゴロットが言いました。「親方。安心してくだせえ。ここは我々イゴロットの土地ですだ。クリスチャンのように泥棒をする者は、一人もいませんのです。」確かにイ

ゴロットの倫理観は、かなり高く、平地に住むカトリックに改宗した部族たちの、乱れた道徳は、山の上には見あたりませんでした。それから７０年ほども過ぎてから、そのでこぼこの険しいハイウエイ（海抜が高い道）を数百回もドライブした私も、イゴロットの倫理観が、平地のカトリックに改宗した部族たちよりも、遥かに高いものであることを、幾度も実感したものです。実は、イゴロットの宗教は、初めから偶像教と排斥され、宣教師たちの厳しい怒りと叱責の的になっていました。筆者が活動していた時期も、宣教師たちは、イゴロットの宗教活動や行事を厳しく禁止し、「それに参加することは重大な罪である」と警告していました。筆者と協力伝道者たちは独自に勉強し、イゴロットの信仰は、必ずしも、偶像礼拝に当たらないと判断していましたが、それを公に語るのは厳格に控えていました。カンニャオと呼ばれる祭り、彼らの宗教行事を放棄し、絶対に加わらないことこそ、クリスチャンの証だと考えるひとたちが、私たちの教会の牧師たちであり、力ある信徒たちだったからです。このように、土地の宗教に敵対するクリスチャン信仰が、すでに根強く定着していたのです。新米の宣教師とその協力教師が、おかしなことを言って、教会全体に問題を起こしたくありませんでした。それでどうしても、その問題には触れずにおこうという、態度になってしまいました。仲間内では、イゴロットの信仰を責めるのは控えようという気持ちがありましたが、とにかく厄介な問題だったのです。

しかし今になって思うのは、どうして、もっとしっかりイゴロットの信仰について積極的に学び、その素晴らしさが、クリスチャン信仰に通じるものであることを、強調して語る勇気がなかったのか、まさに、臍を噛む思いなのです。イゴロットの信仰は、実は、日本の神道に非常に近く、多くの共通点があり、その信仰態度は、目に見えない、手で触れることもできない、口で説明することもできないお方が、天におられる。そのお方は悪を憎み、善を喜び、憐れみと公平さを持って人付き合いをする者には、憐れみと公平を持って報い、寛大な施しをするものには、寛大な恵みでお答えくださるお方なのです。だから、イゴロットの間ではなんでも分け合い、収穫や獲得したものを独り占めしないのが、生活態度になっています。そのために、カトリック信仰の平地の人々の間にある教会は、信徒たちが出し惜しみをするために、牧師は貧しさに晒されているのが常ですが、山岳地の教会はたとえ小さくても、牧師を支えて行くことが出来るのです。さらに最近、チャット GPT などで調べてみたところ、このイゴロットの神は、天地創造の神でもあるとのことでした。

私は一度だけ、このイゴロットの宗教態度、信仰形態を利用した伝道会を開き、教会を建てたことがあります。「私は日本人ですが、皆さんの間に住まわせていただき、皆様と一緒に生活できるように、受け入れて頂いていることを、大変感謝し、喜んでおります。実は、私が信じている神様は、皆様が信じている神様とは、名前は違いますが・・・・・だって私たちの神様のお名前は日本語ですが、皆様の神様の名前はイゴロットの名前ですから・・・・・実は同じ神様なのです。私たちの神様が、私のような小さな者を祝福してくださいましたので、今日は皆様と同じ祭りを開き、皆様をお招きし、ご飯を炊き、豚を煮、たくさんの芋も準備し、皆

様と一緒に喜び楽しみたいと思うのですが、いかがでしょうか。どうか私たちの集まりに加わってください。」このように言って、私が彼らの習慣を真似た祭りの主催者になり、近隣のクリスチャンたちにも協力していただき、３日間のお祝いを開いたのです。そして土地の習慣に倣って共に飲み食いし、私たちの信仰について、特に尊敬されているお年寄りのクリスチャンたちに、焚火を囲み、地産のコーヒーを飲み、一晩中語り明かしてもらったのです。その結果、５家族のクリスチャンが生まれました。今はそれから４０年ほどもたちましたが、この小さな集落にも、それなりの教会が立っています。

もしも伝統的なキリスト教徒が、自分たちが教えられてきた、キリスト教と言う宗教を横に置き、聖書が教える心に記された律法、すなわち神様の姿に似せて造られた人間の本性の大切さに気付き、その人間の本性が導く道に歩みだすならば、人間の間の争いは少なくなり、部族間、国家間の争いごとも少なくなるにちがいありません。いま、西欧の伝統的キリスト教国では、キリスト教信仰を捨て、人道主義を掲げて歩んでいる人たちが沢山います。この人道的な考え方の奔流は、実は、神様の姿に似せて造られた人間の、本来の姿から本能として流れ出るものであると気づくならば、彼らの人道主義は、単なる勝手気まま、自由と人権を重んじ、平和を叫び、平等を謳い、LGBTQ を掲げる人道主義から、聖書的な基盤を持つ、本物の人道主義となります。わずかに観察するだけですが、現在の脱キリスト教の人道主義はかなり過激です。それはまさに権威主義から脱却する人道主義です。脱却からの力が弾みとなって、ともすれば過激に走らせるのでしょう。これに対し、日本の人道主義は、昔から日本文化の底辺に流れる、穏やかな人道主義です。この穏やかな人道主義が、神様に似せて造られた人間の本性から来るものであることを知るならば、多くの日本人は、聖書の教えのすばらしさに、気付くに違いありません。自分たちの精神文化、宗教文化、社会意識の源が、天地をお造りになった神にあると、納得できることでしょう。

たとえば、もうかれこれ数十年も前に、一世を風靡した社会現象に、援助交際というものがありました。まさに人間性の自由を掲げ、他人に迷惑にならなければ、何をしてもかまわないという、日本の精神文化では太刀打ちできない問題が、１０代の女の子たちによって強烈に持ち出されたのです。私は当時、多くの著名な学者たちが、この問題について論じているのを、読み聞きしていました。顔を隠した女子中高校生たちが、テレビの討論会のようなものに出ては、立派な日本人的道徳を掲げて論じる学者たちを、ことごとく論破してしまうのを、不謹慎ですが、何か快く感じながら聞いていたものです。「誰にも迷惑をかけていない、みんなが喜んで楽しんでいるのに、どこが悪いの？」と言う問いに、きちっと応えられる大人は、一人もいませんでした。まさに源氏物語の世界です。あの平安朝の文化を日本の文化として受け入れ、誇りとしているような日本人には、援助交際を非難する理論的基盤がないのです。「天地創造の神様の姿に似せて造られた人間」という、全人類に与えられた人間としての基本的生き方以外に、この問題を論じる基盤はないのです。

西欧のキリスト教が、ユダヤ主義の「卵の殻をお尻にくっ付けたままのひよこ」でいる限り、聖書を本当に大切にしようとする信仰と、調和することがありません。神の姿に似せて造られた人間の本源的な生き方、本能の現れを大切にした生き方こそ、人間が人間として生きるべき道であり、それこそが人間の持つ、もっとも大切な人の道なのです。それはモーセの律法に代表される、旧約聖書の律法に対し、時系列的にも大切さに於いても、先んじるものです。伝統的キリスト教が金科玉条にする、「イエスキリストを信じる信仰」を、異邦人にも要求するのは、イスラエル民族に限って与えられた、すなわち特定の民族と、特定の状況と、特定の必要性に応じて与えられた律法の命令を、すべての民族に当てはめ、その遵守を求める誤りから来るのです。

旧約聖書の律法は、全人類に与えられた命令ではありません。イスラエル民族と言う、神様が救いの働を遂行させるためにお選びになった、一つの民族だけに与えられたものです。それは人間の創造のときから、ずっと時代が過ぎて、人類が罪に陥り悪魔の支配に下り、霊的命を失ってしまったのを、神様が哀れに思い救おうとなさり、イスラエル民族をその働きのために選び出し、彼らを実際に用い始められた時のことです。神様は罪に陥り、悪魔の支配下にいる全人類を哀れにお思いになり、これを救おうと計画なさいました。その計画を遂行するために、イスラエルという、エジプトの奴隷になっていた弱小民族を救い出し、一つの独立民族として彼らと親密な契約関係を結ばれた時、彼らのための法律としてお与えになったものです。彼らをご自分の「全人類救済の働き」のため、教え、導き、正し、訓練し、彼らをその重要な役に相応しくするためです。その特殊な律法をすべての民族に適用し、遵守するように要求するのは、原則的に間違っているのです。

パウロが構築した普遍的福音の神学は、あくまでも彼が生まれ育ったユダヤ人的選民意識の中で、神から啓示された普遍的福音を理解し、まとめ、神学として確立したのです。従って、パウロの神学には決定的にユダヤ人の要素が強く反映されていて、ユダヤ人の外側の人々である、異邦人の立場が充分には考察されていないのです。だからこそ、ユダヤ人に求められる罪の悔い改めが、異邦人にも求められた形跡が、新約聖書全体に残されているのです。「養育係」を与えられていない人々にまで、養育係が与えられていたかのような、要求がされていたこともあるように伺えるのです。異邦人にまず求められるのは、罪の悔い改めでも、救い主キリストを信じ、受け入れることでもありません。先ず天地の創造者である神様を知ることです。その場合大切なのは、自分の中にある人間的本能、気高い道徳的感覚であり、宗教的感覚です。それが、人間を正しい方向に導くからです。そしてその人間を正しい方向に導くものこそ、人間が造られた時に与えられた人間の性質、すなわち神様に似せて造られた性質なのです。これこそが、キリストや罪の悔い改めに、先だって教えられるべきことなのです。その人間をお造りになった神様の栄光と力、そして恵と哀れみ、春夏秋冬に現される慈しみを、まず理解して、それについて感謝し、それを与えて下さった天の父に感謝することなのです。そういうわけで、私たち根っからの異邦人には、パウロの普遍的福音の神学は、宣教論的に不完全

なのです。しかし、さすがにパウロです。実際に完全な異邦人たちを前にしたアテネでの説教では、救い主キリストや十字架の話を最初に持ち出すことはせず、まず、天地創造の神の話から始めています。そして、イエスキリストの話を持ち出したときも、性急に、悔い改めを迫るようなことをしていません。私の理解では、この説教の中でパウロが用いた、悔い改めと言う言葉は、ユダヤ的感覚を引き継いだ学者たちによる完全な誤訳です。（この件に関しては、他のエッセイでかなり詳しく説明していますので、そちらを参考にしてください。）パウロはここで悔い改めを迫ったのではなく、聞いている者たちに向かって、このように呼びかけたのです。「あなたたちは今まで、いろいろな神を信じ、仕えてこられたのを私は知っています。でも今。、天地創造の神という、素晴らしい神様についての説明を、私の口からお聞きになったのですから、ひとつ、『考え方を変えて』、この神様を信じてみてはいかがでしょう。」

旧約聖書が異邦人には関係がないとか、役に立たないと言っているのではありません。旧約聖書は、ユダヤ人の間では、簡単に律法と呼ばれていましたが、決して律法だけが記されていたのではなく、神様に関しての多くの教え、神様の救いの御計画、救い主キリストの必要性など、多くの大切な教えが記されていて、旧約聖書なしには、人間の救いに関する理解は、まったく成り立たないのです。しかし、旧約聖書の中の律法は、イスラエル人、あるいはユダヤ人と呼ばれる民族に対するものであり、異邦人に適用されてはならないのです。

異邦人である日本人に伝道する場合、罪だの悔い改めだのを、最初に持ち出すべきではありません。もう半世紀も前のことですが、熱心な福音派のクリスチャンが、「十字架法」などと言う伝道方法を考え出し、徹底してキリストの十字架の意義を伝えることを、非常に大切にしていましたが、学ぶのは、熱心さだけにしておきましょう。キリストの贖いの働きも、罪の自覚も、悔い改めも、伝道のはじめではなく、ずっと後に持って行きましょう。大いなる神様を知り、その栄光の輝きを知り、小さな私たちに対する愛と思いやりを知り、その祝福をたくさん感じるようになってから、その恵みにあまり感謝もせずに、のうのうと生きて来た図々しさに気づき、大きな祝福を受け続けてきたのに、それに対して少しも感謝もお礼も申し上げず、随分義理を欠き、礼儀に反した生き方をして来たと感じれば、自然と悔い改めも出来るものです。その上、神様がキリストを通して、どんなことをして下さったかを知れば、強烈な悔い改めに至ります。

実は、神様の姿に似せて造られた人間性によって、幼い時から、ごく自然に、天的な存在者を感じながら生きて来た多くの日本人は、何か悪いことをしでかしたことによる罪意識よりも、圧倒的に聖い天的な存在者の前に、自分は汚れた存在に過ぎないという、汚れの意識を持って生きていると、感じるのです。絶対者である神を知らず、人間の社会性を大切にする日本人は、罪意識ではなく、恥の意識を持つというようなことを、有名な「菊と刀」の著者は言いましたが、私は、犯した過ちを罪と感じる罪意識より、自分の存在が汚れていると感じる意識

の方が、強く、根深いものであるように思います。本当の人間性に始まる、日本人の悔い改めは、より深く、強烈なものだと感じます。

聖書の教えに立つクリスチャンとなるためには、当然、キリストを知り、キリストを信じる信仰を知り、十字架も、罪も、悔い改めも知り、旧約聖書の律法も知り、旧約聖書が養育係であるという理屈も理解し、神の救いのご計画の全体像と、そのご計画の遂行について、体験的に知ることが大切です。ここで私が問題としているのは、あくまでも、救いのことであり、宣教論、伝道論に関わる問題です。異邦人に対する福音伝達の、順序の問題です。そしてそれを理解するために、人間が神様の姿に似せて造られたという、大切な事実を確実に理解することを提唱しているのです。